

トマト「ミニティ」 スズラン ニジマス…

古里・生出一これだ

盛岡・玉山

児童、誇りの発表

自然、歴史 1年間テーマ追う



たくさん咲いていたというスズランの研究成果を発表する生出小の児童

盛岡市玉山区の生出小(小笠原洋子校長、児童51人)の6年生は20日、同市玉山区のユートランド姫神で総合的な学習発表会「ふるさと生出に根ざして」を開いた。一人一人が地域に根差した研究テーマを見つけ、住民へのインタビューやフィールドワークを通じ学んだ成果を披露。特産品や自然、歴史など古里ならではの文化に理解を深めた。

同校は2001年から総合的な学習の時間に岩手大教育学部の田代高章准教授の協力を得て、児童1人が一つのテーマを1年間継続し研究。5、6年生の各児童に学生1人が支

援メンバーとして付き、週に1度同校を訪れ研究を支えている。同日は地域住民約100人を前に、児童7人が発表した。児童の提案で品種改良を進めた「ミニトマト」「ミニティ」や生出地区の川に自生するクレソンの食べ方、かつて生出地区にたくさん咲いていたというスズランの観察結果などを披露した。

5年生の時からニジマステーマに研究を続ける三上英昭君は、いけすを作り生態を観察。生出川の水質も調査し「生出川は水がきれいでニジマスがすみやすいということが分かった。これからは川に魚が増えていってほしい」と述べた。三上君の研究を支援した同大教育学部4年の高橋信さんは「研究の熱心さは見習うべきところがあつた。一緒に勉強できたことが一番の収穫」と語った。

田代准教授は「地域の素材を徹底して追究するのが生出小の総合学習の良さ。そしてそれを見守る地域の目の温かさは具全体に誇れることだと思つ。ぜひ次の世代にもつないでいってほしい」と語った。